

ウィーン日本人学校での一工夫

前ウィーン日本人学校 校長

岩手県岩手郡葛巻町立江刈中学校 校長 川 村 俊

キーワード：在外教育施設，ウィーン，特別活動，進路指導，自然体験学習

1. はじめに

「緑濃きウィーンの森に、こだまして…」これはウィーン日本人学校校歌のはじまりである。開校時ウィーンの森のそばにあった学校は、国連のある22区に移転し現在に至っている。子どもたちの数は、小学部と中学部あわせて40名前後で推移。小学1年生から中学3年生までが同じ校舎で学習している。VTR、DVD、パソコン、電子黒板などの教育機器も備えられている。派遣教員は校長と教諭8名。現地採用教員は英語・ドイツ語兼任講師と音楽講師である。他事務職兼通訳が1名。副校長は派遣教諭が兼任。養護教諭、用務員はいない。オーストリア共和国のウィーン市は治安もよく校外授業の引率は担任と通訳ですることもある。危険な目にあったことはなかった。

2. 赴任して

赴任した4月に日本国の財務省監査。6月にはウィーン市の税務署，社会保険庁，教育委員会の監査指導。ウィーン市関係の監査指導は、5年前から指摘をうけていた課題が未着手であったことに厳しい通告と指導だった。在外教育施設は私立学校である。学校課題は学校協会理事長の下，全教職員が力を結集して乗り越えなければならない。それらの解決をみるには2年という時間を要した。

保護者からは2つ話を頂戴した。1つ目は授業の指導と学力向上。とりわけ日本の高等学校の受験対策について。2つ目は，現地ならではの教育のマンネリ化についてであった。

さまざまな情報を頂戴し何度も学校運営計画書を読み返した。初めに取り組むことは学校運営計画書の表題を学校経営計画書に変えることであった。運営ではなく経営する気持ちで取り組まなければ期待に応えられないと感じたからである。お役に立つ学校でありたい。若い派遣教員にもいい研修をしていただきたい。その思いから学校協会理事会および職員へ理解と協力をお願いした。1年目，課題解決できるところは精一杯取り組むとともに新構想をねりはじめた。翌年の3月3名の教員が帰国した。4月に派遣された教員は2名。紆余曲折の末，新派遣教員を含め教職員と子どもたちのいい出会いが始まった。人事はひとつごと？ 人事はありがたいもの？ 意欲的な派遣教員と子どもたちとのいい出会いがはじまり赴任3年目に一工夫の成果が感じられる学校になったと手前味噌ながら回想している。

3. 一工夫

保護者の意見をもとに取り組んだ一例をあげる。

(1) 受験対策について

赴任時進路担当に進路指導についてたずねた。中3は2学期に高校の受験のために帰国するので特に難しいことはない。卒業式への出席は帰国しているので出席しないのが普通であると説明があった。

その秋，「中2の保護者が来年の受験に不安をもち悩まれている」とPTA役員からお話があった。進路についてどのような希望をお持ちなのか2年生担任を中心に何度も面談を実施した。新年度派遣内定の教員とは連絡を取り合い学校課題を説明し理解と協力を求めた。4月に赴任した教員は小学1年生の内容から中学3年生の内容まで系統づけた自作評価問題を持参した。人事はひとつごとではなく，人事であった。

次年度，中学部で五教科の授業を担当する教員と管理職で編成する進路プロジェクトチームを立ち上げた。進路プロジェクトチームは受験生が「希望する高校受験に合格できるよう支援をしよう。合格させよう！」を合言葉に何度

も会議を持ち、生徒に寄り添いきめ細かな指導を長期にわたり進めた。チーム発足1年目の3月。中3の生徒達は各県の公立高ナンバースクール、国大附属高。全員目標を達成。チーム発足2年目の3月。慶応日吉高、早大院合格と目標を達成。いずれの生徒も3月まで在籍し感動的な卒業式を済ませ帰国した。その春にはとなりのインタースクールから転校してくる生徒たちがいた。在籍児童生徒数が減少傾向のなか、子どもたちが増える喜びを全職員でかみしめた。

(2) 現地ならではの教育の吟味

保護者からウィーンならではの学習（現地理解教育）はマンネリしていないか、との意見が寄せられた。家庭でもやれる現地理解の学習は各家庭にお任せをすることにして、学校でなければできない現地の教材力を活用したものはないか検討をはじめた。その中で自然環境の素晴らしいオーストリア共和国の「大自然のなかへ子どもたちを連れだし子どもたちの五感（とくに触覚、嗅覚、味覚の3つ）の活性化につながる原体験をさせよう」という案が出てきた。しかしガイドブックにある情報だけでは少ないので、自然の保全をすすめる営林署の活動（営林署発行資料を和訳）を調べドナウアウエン（国立公園）の存在を知ることができた（営林署の活動の詳細は省略）。

赴任して2年目の夏休み、思いを同じくする4月赴任した屈強な若い教員とドナウアウエン（国立公園）の実地調査が実現した（念ずれば花ひらく）。言葉の不安もあったが路線バスを乗り継いでインフォメーションセンターまでたどり着き、ペンションを紹介してもらいペンションから自転車を借りることができた。そこからとてつもなく広大なドナウアウエンのなかへ足を踏み入れた。ドナウ川の畔でその自然の素晴らしさと広さに驚き、自然教室の開催ができる確信をもてたことに同行をいただいた教員と滔々と流れる大河ドナウ川を眺めながら強く握手をした。

赴任3年目の春、第1回目のウィーン日本人学校全校自然教室を開催した（今年度も実施している）。

ドナウ・アウエン自然教室のようす



指導員の説明を聞く子ら



ボートに乗り支流散策



お弁当の時間

○ 保護者から寄せられた感想

自然教室（ドナウ・アウエン）を終えて、子どもが嬉しそうに帰宅しました。興奮してその様子を話す姿を見て、今回は貴重な体験をしたのだな感じます。今まで教科書や図鑑でしか見たことのない微生物や昆虫（特にアメンボ、ゲンゴロウ）、両生類（オタマジャクシ、大きなカエル、ヤモリ）、ハ虫類（ヘビ）を実際に目にすることができて本当にたのしかったと話してくれました。また先生方の説明がとても分かりやすかったそうです。

ウィーンには日本になくなってしまった自然がまだ多く残されていると私自身も感じます。親としてもオーストリアの広大な自然と直に触れ合う授業が行われたことをとても嬉しく思っています。

教室で学ぶよりも何倍もの学びになった体験をしたのだと感じました。また機会がありましたらこのような校外授業を是非行っていただきたいと思っています。（ウィーン滞在3年小5男子の母）

4. おわりに

赴任年度は開校30周年を迎える年であった。赴任早々に校内教頭と企画立案からはじめた。いま開校30周年記念誌を見返してはウィーンのよき思い出をたのしんでいる。学校の継承と発展は全職員で具体的に取り組むことから始まる。「川は流れていなくてはならぬ」熱き想いをいだいて正直に頑張る教員のためにも管理職は頑張らなければならない。ご支援ご協力を頂戴したみなさまに心より感謝申し上げ終わる。 Vielen Dank!